

夏休みには、英検、新聞、読書に励もう

- 充実した夏休みを送るために -

この「開倫塾塾長通信」は、開倫塾の塾生、保護者、地域社会、ビジネスパートナー、教職員の皆様に、毎月の「開倫塾ニュース」巻頭言ではスペースの都合上お伝えできなかったことを、お読みになりやすいように QandA の形で毎月書かせていただいているものです。今までの内容は、「開倫塾ニュース」の内容とともに「開倫塾のホームページ、林明夫のコーナー」で御覧いただけます。

Q：塾長は、6月初旬から中旬にかけて、フランスのパリとアイスランドのレイクキャビック、マレーシアのクアラルンプールでの国際会議に参加されたそうですが、そこで感じたことをまずはお話し下さい。

A：(林明夫：以下省略)結論から言えば、世界の共通語である「英語」の大切さです。パリでは、6月2～4日にOECD(経済協力開発機構)の本部で開かれた「OECD フォーラム 2008」という国際会議に参加しました。テーマは「気候変動と持続可能な社会」。レイクキャビックでは、5～7日にアイスランド大学で開かれたOECD IMHE(高等教育管理プログラム)主催の「大学の国際競争」についての国際会議に参加しました。クアラルンプールでは、15～16日に「東アジアに関する世界経済会議(World Economic Forum on East Asia)」に参加しました。

ヨーロッパでの会議ではフランス語、クアラルンプールでの会議では中国語と日本語の同時通訳がありましたが、いずれも最も多く用いられたのは「英語」でした。

「気候変動」や「経済」を考えるときに最も大切なのは「人材の育成」、特に「大学での教育」や「学校を出たあとの職業教育」の大切さが盛んに議論されていました。人口32万人のアイスランドにある「アイスランド大学」を、小規模ではあるが世界の大学にして、アイスランドの国民全員が大学院博士課程で十分勉強できるようにしたいと聞かされ、びっくりしました。

Q：外国の人の英語は上手なのですか。

A：(1)ヨーロッパでは、経済の統合が急速に進み、ヨーロッパの中での人やもの、お金の移動が自由になりました。ヨーロッパの一つ一つの国には独自の言語がありますが、ヨーロッパの人々がすべての言語をマスターすることはできませんので、ヨーロッパの共通語として「英語」が用いられています。「英語」でのコミュニケーションができれば、他の国へ移動して、学んだり、仕事をしたり、生活することができますし、他の国から来た人とも交流ができます。

(2)アジアも、ヨーロッパほどではないにしても、アセアン(東アジア経済連合)の国々の中で人やもの、お金の移動がかなり自由になってきました。アセアンの国々は、日本はもちろんのこと、中国やインド、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、中近東、ヨーロッパやアメリカとも非常に交流が活発です。一つ一つの国には独自の言語がありますが、そのすべてをアジアの人々が身に付けることは難しいので、アジアの共通語として「英語」が用いられています。

(3)ヨーロッパの人々は「英語」が上手かと問われれば、10年、20年前から比べれば比較にならないほど皆さんが「英語」が上手になったと言えます。例えば、同じ言語を用いない人が一

人でもグループに入ると、全員がほぼ完璧な「英語」に切り替わるほど「英語力」があります。先日、フランス人が何人かで話している中に私が入っていき、私がいさつくりのフランス語しかできないとわかるやいなや、それまでのフランス語での会話が、「パツ」と「英語」での会話に切り替わりました。

- (4)クアラルンプールでの東アジアに関する世界経済会議では、ごく少数の人を除いて、ほとんど「英語」で議論がなされていました。英語以外の同時通訳を聞いている人は非常に少なく、同時通訳の人が気の毒なくらいでした。
- (5)ヨーロッパやアジアの皆さんは、なぜそんなに「英語」が上手なのでしょう。小学校5～6年生、普通は中学生から高校、大学と英語を勉強しているのは、日本人と同じです。日本人で英語が上手な人のほとんどは、何年間かの留学や海外勤務を経験していますが、ヨーロッパでもアジアでも英語の上手な人の全員が、英語圏での留学や勤務を経験している訳ではありません。ヨーロッパやアジアの人々と同じ期間英語を勉強しているのに、日本人には不得意な人が多いのはなぜか。
- (6)答えは簡単です。日本人には、英語を勉強する目的が、学校で英語を教えているからとか、定期テストに出るから、入試に英語が出るからという消極的なものが多いからだと思います。ヨーロッパやアジアでは、「英語が使えないとよい仕事に就けない」「英語ができないと仕事にならない」「生活できるだけの収入を得るため」「自分のやりたい仕事に就くため」という極めて現実的な理由が強いように思われます。何年か前に「English makes money(英語ができるとお金になる)」という映画が、中国で大流行したことさえあります。

Q：では、どうしたらよいのですか。

- A：(1)「定期テストでよい点さえ取ればよい」とか「入学試験に合格しさえすればよい」という勉強の一步上を目指すことです。もちろん、「英語の定期テストで100点を取ること」や「入学試験の英語で合格点を取ること」は素晴らしいことです。私も大賛成です。
- (2)ただ、折角「定期テスト」や「入学試験」の対策勉強をするなら、もう一步踏み込む、一步上を目指す。「一生使える英語のための勉強」に転換することを、私は強くお勧めします。
- (3)具体的に言えば、時間と手間は少しかかるかも知れませんが、「定期テスト」対策で英語を勉強するときも、「高校や大学入試対策」で英語を勉強するときも必ず、「うんなるほど」と十分「理解」した内容は、大きな声を出して何十回も「音読練習」をし、すべてを何も見ないでスラスラ言えるまでにしましょう。
- 単語や語句を覚えるときも必ず、その単語や語句が含まれる文そのものを「音読」し、そっくり「暗誦(あんしょう)」、つまり何も見ないでスラスラ言えるまでにします。テキストや問題集に出ている単語や語句、文章はすべて、「書き取り練習」を徹底的に行い、一語残らず、一文残らず何も見ずに正確に書けるまでにすることが、英語を上達させるために大事であると思います。「テスト」のための勉強をするときにも、「手を抜かず」にここまで必ずやり遂げることが、一步踏み込んだ勉強。一生使える勉強と言えます。
- (4)ちょっと余談ですが、何年か前に、中国の北京市にある北京師範大学で国際会議があり、私は、前の日の夕刻に大学構内にあるホテルに到着後、大学の中を散歩していました。その日は日曜日でしたが、大学構内のたくさんの教室の明かりがついていました。何をしているのかと思いい校舎の中に入ってみると、どの教室にも学生がたくさんいて、日曜日の夕方だというのに、静かに自習をしていました。私を見つけた一人の学生が、ここが空いているからここで勉強するようにと親切に声をかけてくれました。お礼を言って外に出ると、薄暗い中で何十人もの学

生が、英語の文章を何も見ないで言う練習(音読練習)をしていました。中国の学生は、大学生でも随分熱心に音読までして英語を勉強しているのだなあと、感銘を受けました。

何日かたち、その話を中国の大学の先生にしました。すると、中国の学生たちは寮で生活する人が多い。寮で、毎日のように夜 12 時過ぎまで勉強しているので、体を壊すのではないかとということが一番の心配だ。一斉に電気を消すよう指導しても、なかなか言うことをきかなくて困っているとのことでした。

Q：開倫塾ニュースの8月号の巻頭言に、夏休みには「英検」「新聞」「読書」に取り組もうと書かれていますが、やはり英語が大事だからですか。

A：その通りです。10月の英検合格に向けて100日間、一度「うんなるほど」と「理解」した内容はすべて、「音読練習」「書き取り練習」「問題練習」を「根気強く」「執念深く」繰り返して、「完全に身に付ける」「定着」させて下さい。勉強の仕方を誤らなければ、日本にいても、ヨーロッパやアジアの人々と同じような「英語によるコミュニケーション能力」が身に付きます。

ただし、「英検に合格さえすればよい」と考え「手を抜いた英語学習」をしていると、英検にはとりあえず最低点で合格するかも知れませんが、その後の学校での英語の勉強にはあまり役立つこともなければ、世の中に出る頃にはほとんどすべて忘れ去ってしまい、何の役にも立たないと思います。英語を勉強するときにはいつも、「音読練習」「書き取り練習」「問題練習」も必ず付け加えて下さいね。

Q：なぜ林さんは、毎月のように同じことを繰り返し言い続けているのですか。

A：(1)たとえ短い期間でも、開倫塾で勉強した方は、全員、開倫塾の大切な「塾生」です。その塾生の皆様が、一生で一番大切な時期に、青春の貴重な時間を使って勉強するのですから、一生涯役に立つ知識をその瞬間、瞬間に身に付けてもらいたいと思うからです。

(2)すべての科目について、まずはよく「理解」する。すべての科目について、よく「理解」したことを、声を出して読む「音読練習」をする。正確に書く「書き取り練習」をする。、同じ問題を繰り返しやる「問題練習」をする。この3つの練習で、正確に身に付ける、「定着」させる。十分に「定着」させてから、「テスト」対策で応用力を養う。社会に出て役立つ。

この勉強の仕方は、どのようなことを学ぶときにも必ず役に立ちます。何十年か前には、学校でも家庭でも口を酸っぱくしてこのようなことが言われ続けていたので、ほとんどの子どもは自然と身に付いていたように思います。

しかし最近、悲しいことに、このような最も基本的な勉強方法が、学校でも家庭でもあまり教えられていないようです。そこで、たとえ短い間でも、開倫塾で学んでいただいている間に、「このような勉強の仕方もある」ことを塾生の皆様や保護者の皆様に知っていただきたくて、お伝えしている次第です。

(3)私は、この学習の方法に「学習の3段階理論」と何年か前に名前をつけました。英語に限らず、すべての教科について「理解」「定着(暗誦できる 暗写できる 問題を見た瞬間に条件反射で正解できる)」「応用(合格点が取れる)」と進むに従い、学校の成績も大幅に上昇します。中学入試、高校入試、大学入試の偏差値も大幅にアップします。成績が上昇すればするほど、人生における選択肢が増えます。例えば、入試で言えば、偏差値が高ければ高いほど、合格できる学校が増えると思います。自分の努力で力をつけることで、人生の選択肢を増やすことにも役立ちます。是非お取り組みいただきたく希望します。

*勿論、このように着実に積み重ねた知識は、社会に出てからも役に立ちます。

Q : 「新聞」は学力向上に役立ちますか。

A : (1) 社会の中で活躍する人でテレビをあまり見ない人はたくさんいますが、新聞をあまり読まないという人は、まずいません。皆さん、新聞が毎朝配達されると、その日の新聞を一面から順に「なめる」ようによく読んでいます。

(2) 新聞を一面からなめるようによく読んでいる人は、日本や世界、地域の動き、世の中の動きをよく知っています。

ところで、「新聞は社会の番犬(watch dog)」と言われます。社会の問題点や社会の取り組むべき課題をいち早くかぎつけて(見つけて)、鋭い、厳しい見方で「ものごとの本質」「問題の核心」に迫っていくからです。これが、新聞の社会的使命(mission ミッション)であります。この「社会的使命」が、新聞の記事を書くことを職業とする新聞記者の皆様の誇りでもあるようです。そのため、新聞には社会の問題点や課題が毎日のように報道され続けます。

また、新聞には、普段起こらないような珍しい出来事が報道されます。犬が人間をかんでも新聞には出ないが、人間が犬をかめば新聞には出るという、新聞についてのよく知られた笑い話があるほどです。

(3) 「新聞を読んでいると、この世の中は悪いことや問題だらけで本当に嫌になってしまう。日本ほど悪い国はない。」と嘆く人がいます。新聞記者が命を懸けて取材した中から、社会の問題点やこれから取り組むべき課題を、新聞社が自らの社会的使命(mission ミッション)を果たすためにとりまとめて社会(読者)に毎日示し続けているのが新聞ですから、その新聞を読んで「世の中は悪いことばかりだ」と考える人がいるのはわかります。しかし、「ちょっと待って下さい」と私は言いたいのです。新聞に載っていることは、世の中のすべてではありません。世の中で起こっていることのほとんどは、新聞には出ません。記者が書いた記事すべてが新聞に出ることもありません。新聞の紙面は非常に限られていますから、新聞社としてこのことだけは世の中に、つまり「読者」に必ず伝えようという内容しか新聞には出ません。出すことができません。

ほのぼのとした心暖まる内容も時々は出ますが、記事のすべては社会の問題点や読者に今、新聞社として伝えたいことです。くれぐれも、新聞を読んで、新聞に出ていることが世の中のすべてだと考えないようにお願いします。

(4) もう一つ考えていただきたいことがあります。時々、家で購読している以外の新聞をコンビニや駅のスタンドで買って読んだり、図書館でお読みになって下さい。同じテーマなのに、全く違った立場から取り上げていることが多いことにお気づきになると思います。よく考えれば、新聞の一つ一つの記事は、あるテーマについてのその新聞社としての「意見の表明」だとも言えます。「新聞社としてのものの見方」を示したものが、一つ一つの記事であると考えれば、その記事はあとあと考えると誤りであったと言える場合も出てきます。

ですから、「新聞を読むときには、批判的な精神で読む」ということも、どうかお忘れなくお願いします。ただし、新聞社や新聞記者、新聞に原稿を書く人は、一人残らずそのことを自覚しております。ですから、「社会の公器(社会をよくするための公の武器)」である新聞には、記者としての信念(良心)と、事実のみに基づいた内容を書き続けていると私は信じています。

(5) 例えば、私は、6月14日に読売新聞の栃木支社のご依頼で840文字のコラムを執筆させていただきました。「栃木県の将来に役立つことを具体的に書いてほしい」という新聞社の依頼にできるだけ沿うように、また、事実と反することを書くことのないように、20回近く内容を書き直しました。この塾長通信の付録、「参考資料」としてお載せいたしますので、ご高覧下さい。一番言いたかったのは何かと言えば、「従来型の公共投資」はもう中止したほうがよ

いということですが。

(6) 話をご質問から大分それてしまい、申し訳ありませんでした。

「新聞を読むことは学力向上に役立つか」ということですが、大いに役立ちます。

新聞を毎日一面からなめるようにじっくりと読み、考える能力が身に付いてくると、「短い時間に大量の文章を読む力」、つまり「読解能力」が確実に身に付きます。

新聞は、文字と写真、図表などで読者に最新の情報を伝達しますので、「ことば」の使い方、「写真」や「図表」からの情報の収集の仕方を学ぶことができます。試験にも役立ちます。外国も含め、政治や経済、文化、スポーツ、歴史などが絶えず紹介されますので、小学校から高校3年生までの社会科の勉強に直結します。

どの新聞にも科学のページがあります。最新の科学や技術についての記事もたくさん載っていますので、理科の勉強になります。時々、数学についての記事も載っていますよ。

英検準2級を取る頃から、英字新聞に親しむことをお勧めします。英字新聞を毎日一面からなめるように読み、考える能力が身に付けば、これ以上ない「英語」の勉強になります。英字新聞は、大学入試に絶大な効果を出します。大学での勉強にも役立ちます。

新聞には、社会の出来事がたくさん載っています。中でも多いのが、「犯罪」についての記事です。新聞をよく読んでいると、「何が犯罪であるか」がよくわかります。その原因もしばらくすると報道されますので、「犯罪のない社会をつくるにはどうしたらよいか」を考えることができます。何が犯罪かわかれば、「せめて自分は、そのような犯罪を犯すことはしないようにしよう」と「自分自身をコントロールする、律する能力」を身に付けることができます。このように、新聞を通して、人間として最も必要な「自律的に活動する能力」を身に付けることは大切ではないかと考えます。

また、何が犯罪か、その原因とは何かがわかってくれば、そのような犯罪の被害者にならないためにはどうしたらよいかを、自分で考えることもできます。あれほど新聞で報道された「オレオレ詐欺(さぎ)」の被害にあった方は、そのような犯罪が自分の周りで起こったらどうしようと、新聞を読んで考えなかったのかも知れません。「新聞を読んで考える」ことが、犯罪の被害者にならないためにも必要です。犯罪も含め法律についての教育を、「法教育」と言います。新聞は、「法教育」に極めて役に立ちます。

* ちなみに、7月は法務省の主催する「社会を明るくする運動」月間です。

「自分自身が犯罪を犯すことがないようにしよう」

「犯罪に巻き込まれないようにしよう、犯罪の被害者にならないようにしよう」

一度犯罪を犯した人であっても、刑務所や少年院などの「矯正施設(きょうせいしせつ)」や「保護観察」などで十分自らの罪を悔い改め、反省した人は、「寛容(かんよう)」な心を持ち、「偏見」なしで、社会の一員として迎えよう。

この ~ が、「社会を明るくする運動」の上で大切なことなのではないかと私は考えます。皆様はどのようにお考えですか。

「入学試験」をはじめとするありとあらゆる試験に、「新聞を読んで考える能力」は役に立ちます。なぜなら、難しい試験であればあるほど、短い時間に大量の文字や大量の資料を正確に読み込んだ上で、自らの力で正解を出し続けなければならないからです。

新聞を読んで最も養われる能力は、「批判的思考能力(ものごとを自分の力で批判的に考える能力)」であります。

試験では、すべての文章や資料を自分の力で読み込み、何が正しいかを自分の力で批判的に考えた上で正解を導かねばなりません。「新聞を読んで考える能力」は、「入学試験」や「国家試験」、「資格試験」などあらゆる試験の合格に直結すると言えます。

「新聞を読んで考える能力」は、「入学試験」や「採用試験の際に課される論文式試験」や「面接試験」にとっても役立ちます。

「～についてどう考えますか」と問われます。そこでは、自分の考えを「～だから～です」と論理的に、わかりやすく述べるのが求められます。その際、社会で現在問題となっていることにどのように対処したらよいかを、新聞をじっくり読み込み、普段から考えていると、とても説得力のある説明ができます。

「新聞を読んで考える能力」の高い人は、論文試験や面接試験に強いと言えます。

「学力は何によって決定するか」と言えば、学習者「本人の自覚」と教え手である「先生の力量」であると私は考えます。そこで、教え手である先生方は、開倫塾の250名以上の先生も含めて、「研修」などを通じて、自らの「教師としての力量」を向上させるために努力をしています。

学習者「本人の自覚を促す」のに、日本や世界、地域など世の中で起こっていることを新聞を通してよく学ぶことは役に立ちます。世の中で起こっている問題や課題の解決に、自分が少しでも役立ちたい。そのためにこのような勉強がしたいと考えることが大切です。ただ、今の自分の現状ではすぐにはそうできないので、自分の不足することをよく「自覚」してそれを補うために勉強する。こうなると、勉強に目的意識ができます。勉強にターボエンジンが付いたようになりますので、「学習効果」が生まれ、「学力」も一気に伸びます。

何のために勉強するのか、勉強する具体的な目的を発見するのも、「新聞を読んで考える能力」は役立ちます。

Q：社会で活躍している人は、よく新聞を読んで考えていると林さんはおっしゃいましたが、「新聞を読んで考える能力」は、仕事や社会的な活動、日々の生活に役立つのですか。

A：(1)「仕事」とは何かと言えば、「お客様の問題解決」に役立つこと。「お客様のお役に立つこと」を通じて社会のためにも役立つことが、「仕事」ではないかと私は思います。「家庭の仕事(家事)」や「ボランティア活動」、「NPO活動」、「様々な地域の活動」などあらゆる人間の営みは、自分を含めて誰かのためになります。人様のお役に立つものです。具体的に言えば、問題解決の役に立つと私は考えます。

(2)ただし、世の中の動きは非常に早く、お客様や人々の抱える問題も、世の中の早い動きと共にどんどん変わっていきます。ですから、仕事や活動をするときには、世の中の動きは何なのかをできるだけ正確に知る必要があります。やってよいこと悪いことをよく「理解」した上で行動することが求められます。

その世の中の動きをできるだけ「正確に」知る上で一番役に立つのが、「新聞を読んで考える能力」だと私は考えます。

(3)もちろん、TVやラジオのニュースや特別番組でも大きな動きはわかり、素晴らしい内容のものもたくさんあります。インターネットや携帯からも情報はとれます。しかし、腰を落ち着けてじっくり分析し、深呼吸しながら世の中で起こっていることの本質を考えるのには、新聞は必要不可欠です。

以上のような意味で、仕事や社会的活動をするのに「新聞を読んで考える能力」もとても役に立つと考えます。

(4)新聞には、「家庭生活」や「人間としての生活」の上でとても役に立つことが、毎日たくさん載っています。病気をせず、また、病気になったらどのように克服しながら「いつまでも若々しく生きる」ことができるかについて、毎日のように大特集が組まれているのが現代の新聞です。

例えば、人間の生活で最も大切な健康(心の健康と身体健康)をどのように維持するか。心の健康を害する原因となるストレスを、どのように管理するか。どのような食べ物を、どのように食べたらよいのか。病気にならないためには、どのようにしたらよいのか。病気になったら、どのような対処をすべきか。新聞をよく読んでみると、とても丁寧に、わかりやすく説明されています。

「介護」についても、毎日のように記事が載っています。

どのような本を読んだらよいのか。注目すべき本の紹介がとても丁寧なのが、新聞です。大切なお金をどのように使ったらよいのか。お金の借り方、借金の返済の仕方、預金や保険、年金だけではなく、株式の投資の仕方などにも、かなり丁寧な説明があります。

人生の失敗と言われるものにはいろいろあるでしょうが、「お金の使い方の失敗」は、あとあと非常に厳しいものがあります。お金で失敗しないように、新聞に出ていることで大切と思われることは切り抜きをしてでも、あとで時々読み返すことをお勧めします。

「整理」、「整頓」、「掃除」の仕方、「庭」の手入れの仕方、「室内」の美化の方法など、事細かな記事があります。

「人生相談」や「投書欄」は、人は何に悩んでいるのか、いろいろなテーマについて人々はどのように考えているのかを知り、自分の考えをまとめるのに役立てることができます。

今日、明日の天気を知る上で、新聞の「気象欄」は有用です。

IT、音楽や絵画、芸術、スポーツ、趣味、文学(小説、短歌、俳句、川柳)、登山、釣り、旅行、囲碁、将棋、パズルなど、生活に潤いをもたらす上で役に立つありとあらゆる事柄が、新聞には紹介されています。

様々な勉強会の案内は、社会参加を促します。地元版の「死亡欄」は、友人や知人、その家族の不幸を知り、悲しみを共にする機会を与えます。

*このように、なめるようによく新聞を読み考える能力を身に付けることは、生活する上でも非常に役に立ちます。

Q：開倫塾では、「新聞を読んで考える能力」を塾生全員に一日も早く身に付けてもらいたいということですね。

A：その通りです。

(1)夏休みは、「新聞を読んで考える能力を身に付ける」のにはもってこいの時期です。あまり無理をしなくてよいですから、「新聞を教育へ(NIE 活動)」用として、家族の方皆様が読み終えた「昨日の新聞」を教材用としてプレゼントしてもらい、思う存分「昨日の新聞を読んで考える能力」を身に付けて下さい。

(2)これは、「できる、できない」という1つの大切な「能力」ですから、「早く身に付けた方がよい」、「早くできるようになった方がよい」と私は考えます。

(3)1つの目安は、10月第2週の「新聞週間」です。「新聞週間」までに、「新聞を読んで考える能力」を身に付けましょうね。

もう1つの目安は、11月の「NIE 週間(新聞を教育に Newspaper In Education)」です。

開倫塾では今年の秋も、「新聞を読んで考える能力」を向上させるために、新聞記者の皆様

を各校舎にお招きしてお話をお聞きするなど、様々なイベントを企画しています。

- (4)小学生は1日20分、中学生は40分、高校生は1時間が、「新聞を読んで考える」の一応の目安です。開倫塾の塾生である間に、是非この「能力」を身に付けて、一生涯活用して下さいね。

Q：夏休みに取り組んでもらいたいことに、「読書」があるそうですね。

A：(1)はい。OECD(経済協力開発機構)のPISA(15歳時の国際標準学力調査)の結果から、学力の高い生徒ほど「読書量」が多く、「勉強の仕方」を身に付けていると言われております。

開倫塾では、夏休みをきっかけに、塾生の皆様に「幅広い読書」、「質の高い読書」をお勧めいたします。

- (2)では、どのような本から読んだらよいのか。先日パリで参加した「OECDフォーラム2008」の2日目に、ハリー・ポッターの日本語版の翻訳をなさった松岡佑子(Ms. Yuko Matuoka)さんから、10名ちょっとの小さな会議で1時間余り英語でお話を聞く機会に恵まれました。

松岡さんは、「少し長目かもしれないが、とてもおもしろい話なので、今まで本や小説をあまり読んだことのない人は、このハリー・ポッターから読書の楽しみを経験してほしい」とおっしゃっていました。全巻の翻訳が完結した「ハリー・ポッター」を、夏休みの読書にするのも素晴らしいと私は考えます。

*英語版よりも、日本語版の方が文字も大きく、はるかに読みやすくなっています。英語で読んでみたい人は、英語版にも挑戦して下さいね。(たとえ1ページでも英語で読んでみると、よい勉強になりますよ。)

- (3)できれば、日本の代表的な作家である夏目漱石や、芥川龍之介、森鷗外、志賀直哉などの代表的な作品も、積極的にお読みになることを心からお勧めします。また、ハリー・ポッターなど世界の代表的な作家の作品を、夏休みにゆっくりお読みになることも素晴らしいと思います。オー・ヘンリーの「短編集」などは、何度読んでも趣(おもむ)き深いものがあります。

- (4)文学作品以外にも、TVのニュースや新聞などで取り上げられるテーマを深く掘り下げた「新書(しんしょ)」も少しずつ読む練習をするとよいでしょう。

私は、岩波書店から出ている「岩波新書」が好きで、中学生の頃から読み始めました。高校生の頃は1か月に1~2冊のペースで読んでいました。とても勉強になりました。

現在は、小学校の上級学年生でもわかるほどわかりやすく書かれた「新書」が、20余りの出版社から毎月のように出ています。図書館や少し大き目の書店に出掛けて、自分の興味のあるテーマについての「新書」を見つけ、この夏休みに何日かかけて、ゆっくりお読みになることをお勧めします。

「新聞」を読んでもうちょっと勉強してみたいテーマを「新書」で勉強することも、1つの「勉強の仕方」です。

- (5)夏休みのように少し長目の休暇の「読書」としてふさわしいものに、「古典」があります。

中学生になると、国語の教科書に日本や中国の古典が紹介されています。教科書に紹介されているのはどれも、各作品のごく一部にすぎません。先生の授業を聴いているうちに、もう少し読んでみたいと気に入った古典があったら、図書館や書店でその古典の名前の付いた本を捜してみましよう。有名な古典ほど「文庫本」に入っていることが多いので、手軽に捜せます。本を手にしたら、最初の何ページかをゆっくり読んでみて、気に入ったら図書館で、または書店で本を購入して、ゆっくりお読みになると素晴らしいと思います。

「古典」を読むときには、原文が難しければ訳文をまず読んでみる。それから原文を読むの

も1つの方法です。原文で読むのがどうしても大変なら、あまり無理をせずに、訳文だけを全部ゆっくり読むこともお勧めします。

私は、教科書に出ている「徒然草」や「枕草子(まぐらのそうし)」、「奥の細道」をお勧めします。

気に入ったところは繰り返し繰り返し、音読をしたり、書き写すと、とてもよい勉強になります。

中国の古典では、「論語」を声を出して何回もお読みになることをお勧めします。

*私は、世阿弥の書いた「風姿花伝(花伝書)」と宮本武蔵の「五輪書(ごりんのしょ)」が大好きで、今でも時々読んでいます。学校で少し学んだ古典を、社会に出てから時間を見つけて読み続けることは、とてもおもしろいと思います。「二宮翁夜話」など、二宮尊徳のお書きになった本も大好きです。

(7)最後にお勧めしたいのが、「自叙伝(じじょでん)」、つまり「伝記(でんき)」です。

社会で活躍した人が、人生の最後に、自分の人生をふり返り書き残した「伝記」ほどおもしろいものはないと言う人もいます。「伝記」自体が「古典」になっているものも、たくさんあります。

シュリーマン「古代への情熱」

福沢諭吉「福翁自伝」

この2冊は、自伝の中でもお勧めです。

Q：本はどのように選び、手に入れ、どこで、どのように読んだらよいのですか。

A：(1)どのような本を読んだらよいかは、大切な問題です。人生の貴重な瞬間を読書に充てるのなら、読むに値する本を選ぶことが望まれます。

(2)私は、学校のいろいろな科目の教科書で取り上げられている人の作品をお勧めしたく思います。教科書を勉強したり、学校や開倫塾で授業を聴いているうちに興味を持った人の書いた作品を、まずは図書館に行って探すことをお勧めします。「賢い人は図書館に行く」と私は思います。これは、日本だけでなく世界共通です。「図書館」には、「司書」の先生がいます。「司書」の先生の仕事の1つは、皆様が読みたい本をいっしょに探すことですので、遠慮しないで「司書」の先生にどんどん相談しましょう。

(3)図書館は、学校の中だけではなく、市や町にも必ず1つ以上あります。市や町の図書館にも積極的に出掛けましょう。市や町だけでなく、どこの県にも県立図書館がありますので、県立図書館にもどんどん出掛けましょう。国には「国立図書館」があり、誰でも利用できます。

(4)ありとあらゆる大学にも、図書館があります。東京都内の大学はすべての人に開放されておらず、突然行っても一定の手続きを行わないと利用できない場合が多いですが、開倫塾のある栃木県、群馬県、茨城県の大半の大学・短期大学の図書館は、その日に行って簡単な手続きさえすれば(貸し出し以外は)誰でも利用できます。(学生証など身分証明書が必要なところがあります。)お金はかかりません。(コピーをとる場合は別ですが)

皆様のほとんどは、高校を卒業後、大学や短大・専門学校に進学なさるので、小・中学生、高校生のうちから大学の図書館を利用することは、とてもよい大学進学のための勉強になります。身近に進学したい大学があったら、その大学の図書館を利用して勉強することを強くお勧めします。(大学の図書館の開館日は、ホームページを見ればわかります。)

(5)書店で本を探す場合は、できるだけ品揃えのよい書店をお勧めします。古本屋さんにも、よい本がたくさんあります。

(6)本はどこでどのように読むかと言えば、どこでもどのようにでも読めるというのが私の考えです。

読みたい本はいつもカバンの中に入れておき、時間があったらコツコツと読むのも1つのやり方です。

本が自分の所有物である場合には、気に入ったところに線を引いたり、書き込みをすることもできます。(図書館の本は公共のものですから、線引きや書き込み、ページを折ったりすることは絶対禁止です。)

(7)読んでいて気に入ったところがあったら、「書き抜き読書ノート」に、できるだけ丁寧な文字で書き抜いておきましょう。そして、折に触れ、書き抜いた内容を声を出して読んでみる。このことは自分にとって何を意味するのかを考えることは、とてもよい勉強になります。

本を読んでいて気に入った何行かを書き抜いた上で、本の名前や著者、日付を書いておくと、立派な「書き抜き読書ノート」ができ上がります。

(8)「読書感想文」は、このような本格的な読書をし続けてから、折角読んだのだからこれだけは書き残しておこうという考えで書くのもよいかも知れません。

はじめから宿題に出た「読書感想文」を書くつもりで本を読むと、本を読んでいてもおもしろくなくなることがあります。まずは、気に入ったところを書き抜く「書き抜き読書ノート」づくりからスタートするのもおもしろいですよ。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月の「塾長通信」も長い文章を読んでいただき、有難うございました。一人ひとりの塾生の皆様にとって、一生に一回しかない大切な大切な「夏休み」です。「捨てなければ得られない」という、京都一燈園の石川洋先生のことばがあります。やりたいこと、やらなければならないことのすべてはできません。自分の力でよく考えて、よく選んで下さいね。すべてをやろうとしないこと、あまり無理をしないことが大切です。

保護者の皆様へのお願い

誠に申し上げにくいことではありますが、開倫塾では「夏のお中元」「年の暮のお歳暮」「新年のあいさつの品」「合格御礼の品」「おみやげ」、その他様々な機会における「贈物」は、開倫塾各校舎および開倫塾本部事務所では一切受領してはならない規則になっております。

開倫塾の教育方針に御理解・御協力していただくだけで十分でありますので、一切の「贈物」はご遠慮させていただきたく予めお願い申し上げます。

失礼とは存じますが、よろしくご理解賜りたくお願い申し上げます。

- 感謝 -

- 6月25日記 -